

フランス語

一 序 章

1 幕末、明治初期における仏学の黎明

陸軍とフランス語教育

鎖国を続けていた幕府は一八五四（安政元）年ついに日米和親条約を結んだ。アメリカに次いで、イギリス、ロシア、オランダ三国との間にも和親条約が結ばれ、立ち後れたフランスは特命全權大使ジャン・バティスト・ルイ・グロ男爵を日本に派遣して、一八五八（安政五）年九月に条約が調印された。初代の駐日フランス総領事兼公使デュシエヌ・ド・ベルクールが来日して批准書を交換したのは翌五九年八月二十六日であった。仏学の重要性の認識の高まりの背景には、幕府とフランス国との間で結ばれたこの日仏修好通商条約ならびに貿易章程がある。

一 序 章
一八五七（安政四）年正月十八日に開業した蕃書調所では、幕臣の子弟を稽古人（生徒）に英語、仏語、蘭語、独語、魯語が教授され、加えて科学技術が教えられた。一八五九（安政六）年三月には仏学の先駆者と称される村上英俊（一八一―一八九〇）が教授手伝（助教授）に任ぜられ、これが我が国の公的機関でフランス語が教えられた最

初となった。一八六〇（万延元）年に「英学」の部門が分科独立したのに続いて、一八六六（慶応二）年には「仏学局」が独立した。この仏学局には、ロシアに留学して、後に東京外国語学校のロシア語教員となる市川文吉（仏学局の設置に尽力した市川斎宮「兼恭」の長男。当時十九歳）がいた。

幕末から明治初期にかけての洋語の養成機関としては、蕃書調所のほかにも、幕府直轄の学校として横浜の仏語伝習所（「横浜語学所」とも称された）があり、長崎でもフランス語が教えられていた。来日したフランス人神父の私塾や諸藩の洋学所もあった。家塾は、村上英俊が幕末に開いた「達理堂」をはじめとして、維新後、年を追ってその数は増え、一八七二（明治五）年を頂点として東京府だけで数十に上っていた。そのなかに箕作麟祥の家塾、中江篤助（兆民）の仏学塾があった。

横浜の仏語伝習所は、幕府の近代的な海陸軍創設計画の一環であった。幕府は、一八六二（文久二）年の頃から、陸軍の三兵（歩兵、騎兵、砲兵）を近代的に改造しようとして、その指導をイギリスやフランスに求める計画を立てた。二代目のフランス全権公使兼総領事のレオン・ロッシュに協力を申し入れ、一八六四（元治元）年十二月には横須賀に造船所、横浜に製鉄所を建設することが決定されて、フランス人技師、軍事顧問多数を招聘することになった。こうしてフランス人の来任（シャノワヌ大尉に率いられた軍事顧問団の第一陣は一八六七年一月に横浜に到着）にそなえ、フランス語伝習が急務となったのである。仏語伝習所（一八六五「慶応元」年八月、海岸通本町二丁目）に新築、公使館の傍らに設営）が設立され、教授には、メルメ・（ド・）カシオン（Mernet [de] Caillon、日本名は「和春」「カシオン」、フランス国公使館の書記官・通訳官兼公使秘書官）をはじめとするフランス公使館の書記官等があった。後述するように、外国語学校の開学とともに、仏語学科の初代筆頭教諭となった今村有隣はメルメ・（ド・）カシオンの指導を受け、箕作麟祥にも師事してフランス語を習得した人物である。

この横浜の仏語伝習所は、後に明治新政府に接收されて兵部省兵部寮に属し、「幼年学舎」と改称され、フランス人は「お雇い外国人」として雇用された。この兵学舎はやがて陸軍幼年学校として存続してゆく。陸軍がフランス式を採用したのには語学が決定的作用をした。つまり、上述のように、幕末に幕府が招聘したフランスの軍事顧問団に教えられ、横浜の仏語伝習所で教育を受けた者からである。海軍ではイギリス式の兵制が布かれた。陸軍幼年学校では、フランス人教官によるフランス式教育が徹底して行われた。柴五郎（陸軍幼年学校、士官学校を経て清国公使館付武官。義和団事変に際し、そこでの活躍で国際的に知られるようになった）の回想によれば、代数、幾何、地理、歴史などもフランス語で行われ、訓練（訓練）の際の号令も「アタンシオン（気をつけ）」、「アン・ナヴァン・マルシュ（前へ進め）」のようであったという（村上兵衛「守城の人——明治人柴五郎大将の生涯」光人社、一九九二年）。

明治初年、政府は大学南校を開き、語学も諸学科も英仏独の三つの語学別に分かれていた。フランス語の習得によって期待されたものは「兵事・法律・経済・美術等」の分野であって、それらを模倣させ、日本の近代化をはかろうとしたのだった。

仏語学科が生んだ法学者

法学との関係について述べよう。一八七二（明治四）年九月、司法省の中に設けられた法学校「明法寮」があった。入学した生徒は南校の仏語学生であって、一八七四（明治七）年三月にはフランス人のボワソナード（Gustave Emile Boissonade）が法科専門の教師となった。明法寮は後に廃止されて、司法省の直轄の司法省法学校となり、さらに一八八四（明治十七）年には文部省直轄の「東京法学校」に改組された後、翌八五年九月には東京帝国大学法



中央が梅謙次郎、左が富井政章

「民法・商法施行100周年記念郵便切手」

1999年7月19日発行

むフランスの六法の翻訳は一八六九（明治二）年から開始され、翌七〇年の民法典編纂事業では箕作麟祥（当時は南校の中博士）のフランス民法典の翻訳に基づいて検討が行われていた。一八七九（明治十二）年にはボワソナードが中心になってフランス民法典をモデルに民法典の編纂が行われ、施行をめぐる「民法典論争」が展開され、修正作業が三名の起草委員（梅謙次郎はその中の一名）によって行われ一八九八（明治三十一）年に施行された。これをドイツ民法草案を中心とし、ほかに英米法をも含む各国の民法を参考にして修正したものが現行の民法典であって、すでに施行後一〇〇年になる。

明治二十年代の初めは法学教育の全盛時代であり、官僚指導者層の基礎的教養として「法律」は必須であった。一八八六（明治十九）年十一月、フランス語学校「東京仏学校」が開校している。これは、「仏学会」(Société de Langue Française)（八六年五月成立）を母体とし、辻新次が会長となっていた。これは仏学を志すものに機会を与えようとするもので、仏国教師が講義にあたった。「東京仏学校」は、後に東京法学校と合併して一八八九（明治二

学部)に合併された。法学教育の体制が切り替わるこの時期に、東京外国語学校でフランス語を習得した梅謙次郎等（後述）は法学を勉強して活躍の場を見出していった。

明治開国以後、諸法典の編纂が急がれていた。安政期に結ばれた一方的に不利な通商条約改正は悲願であり、西欧諸国の近代法制を導入することが強く考えられていたからである。明治開国以後、憲法を除いた諸法典のなかでとくに急がれたのは民法典編纂である。民法典を含

十二年「和仏法律学校」が生まれた。初代校長は当時司法省の次官であった箕作麟祥が嘱任され、理事には辻新次、今村有隣、中川元等の名前がある。

梅謙次郎は、東京外国語学校仏語学科を一八八〇（明治十三）年二月卒業、司法省法学校（前述）の第二期生の補充募集に応じて入学、八四年七月同校を首席で卒業し、東京大学法学部教員となり、同年十二月にはフランス留学を命じられ渡欧。梅は、一八九九（明治三十二）年には和仏法律学校の校長となり、法学者として民法、商法の起草にかかわり、法制局長官、文部省総務長官に任じられた。一九〇三（明治三十六）年八月専門学校令によって、財団法人和仏法律学校法政大学と改称され、梅は現在の法政大学のもとを築くことに貢献した。一九〇五（明治三十八）年十一月日韓協約が締結され、初代統監となった伊藤博文は梅を法律顧問に推挽し、梅は韓国に渡り、立法事業にたずさわった。梅は渡韓中、五十一歳で病没した。

明治画壇の活性化と仏語学科

明治は日本の洋画の夜明けの時代でもあった。東京外国語学校は、岡倉角蔵（寛三、号は「天心」、父は福井藩士。八歳から英語を始め、一八七四「明治七」年英語学科下等一級入学、東京開成学校を経て東京大学文学部に進み、一八八〇「明治十三」年七月卒業）、原田直次郎（七四年仏語学科入学）、黒田清輝（一八八三「明治十六」年仏語学科に転入学）、有島生馬（本名は壬生馬。一九〇一「明治三十四」年伊語学科入学）等の逸材を生んだ。

抜きだした英語力をもって世に出て、明治の思潮を体現して美術教育の方向と実践を担い、二十九歳の若さで、開校した東京美術学校の校長になった岡倉天心をはじめ、明治画壇を代表する逸材を外国語学校が輩出した背景には、幕府が設けた蕃書和解御用掛が、その後に洋学所そして蕃書調所になり、外国語学校へと発展した沿革の中にその理



黒田清輝 自画像

由を見出すことができるのである。

幕府の蕃書調所は洋学を対象にしている、「画学」(はじめ「絵図調方」と称された)が置かれていた。そこで「画学」は美術としてではなく、測量、物産学、物理学などの補助学科として扱われていた。一八六二(文久二年)には画学局は独立し、川上冬崖が指導にあたり、高橋由一らが勉強していた。西洋画法の実利性に着目した流れが維新後の学校や陸軍での「画学」の授業へと継承されていくのである。

高橋由一の指導を受けて本格的に画家の道歩んだ原田直次郎は、東京外国語学校仏語学科在籍中に絵画に興味をもったが、当時の外国語学校には上等第一級に「画学初歩」(一八七三年『外国語学校教則』)、上等語学第三年に「野画」(一八七四年『外国語学校教則』)の科目が置かれていたことは注目に値しよう。

黒田清輝(新太郎、清光)は島津藩士の子。築地の英学校から一八八三(明治十六)年に東京外国語学校仏語学科二年級に転入学。義兄のフランス公使館赴任に伴い、法律家を目指して一八八四年パリに渡った。そこで山本芳翠と出会い、黒田は絵を描くようになり、画才をあらわすようになる。パリで藤雅三が「外光派」ラファエル・コランの門下に入るとき黒田は通訳として同行し、これがきっかけとなり、コランに師事することとなった。黒田は法律の勉強との両立を試みたものの、結局画業に専念するようになった。黒田の帰国によって明治の中頃のわが国の画壇に新風が吹き込み、本格的な西洋絵画が移植された。

2 旧東京外国語学校 一八七三—一八八四年

初期の教授陣

仏語学科の歴史をみるには、本校の開校までの経緯を理解しなければならない。東京外国語学校は、開成学校語学生徒、第一大学区独逸学教場（独語）および外務省から文部省に移管された外国語学所（独・露・清語）の三つが合併して成立したものである。

開成学校では英仏二語学科を置き、次いで独語学科を置いて一八七二（明治四）年には南校（医学校を東校とした）と称した。この南校は第一大学区第一番中学と改称された後に、七三年四月にはまた「開成学校」（七四年以降は東京開成学校と称した）という名称に変わった。開成学校は英語によって教授することとし、法学、理学、工業の三つの専門科が置かれた。英語を教授・学習用とする制度ができた結果、仏独語科生徒のあつかいを決める必要が生じ、仏語科生徒のためには諸芸学科、独語科生徒のためには鉱山学科を設け、合わせて五専門学科併置となった。専門学生徒は開成学校の生徒であり、語学生徒はこのとき開成学校の一部である外国語学校生徒であった。

一八七三（明治六）年十一月四日には開成学校外国語学校（あるいは開成学校語学教場）を独立させ「外国語学校」と改称した。こうして外国語学校で英仏独魯清の五つの外国語を教授することになったのだが、英語科のみは七四年十二月に外国語学校から分離されて東京英語学校となり、一八七七（明治十）年には東京開成学校に直結する東京大学予備門となった。

一八七三年開学の当時、外国語学校は修業年限は四年で、一日六時間すなわち一週四日間二四時間の授業があった。

課程は中級・上級課程（これを当時は「上等」と呼んだ）の二年間と入門・初級課程（これを「下等」と呼んだ）の二年間に分けられていた。学生数は英仏独魯清語の全学科四五三名、そのうち仏語学科は七五名。七四年には修業年限は上中等下等合わせて六年となり、さらに一八七六（明治九）年には下等三年、上等二年の五年となり、以後この五年制をとっていくことになる。明治初期の外国語学校の仏語学科卒業生の進路は、司法省法学校に入るか、陸軍に入るか、あるいはフランスに留学するかの途があった。

外国語学校の開校の頃、仏学を修めた学校長が出ている。初代校長伴正順のあとに就任した辻新次とその後の中江兆民（篤助、のちに篤介）の二人がそれである。

辻新次（一八四二—一九一五）は信州松本藩士の子。蕃書調所に入り、フランス語は村上英後の高弟小林鼎輔とフランス人ブーヴに学んだ入江文郎の二人に師事した。開成所の教授試補、南校校長をへて、七年に外国語学校校長に就任、八六年には文部次官となっている。墓は染井靈園一種イ一三号四側一番にある。

中江兆民（一八四七—一九〇一）は土佐藩足輕の子。藩校「文武館」に学び、長崎に行き、平井義十郎からフランス語を習った。江戸に出て村上英俊についた。一八七一（明治四）年、二十五歳のときに司法省出仕となってフランスに留学、一八七四（明治七）年帰国。仏蘭西学舎（後の仏学塾）を開塾。兆民は七五年二月東京外国語学校校長に就任、時に二十九歳。兆民はこの学校長を三か月たらずで辞職している。

開学の頃の教授陣をみておこう。『東京外国語学校官員並生徒一覽』（一八七四「明治七」年三月）によれば、今村有隣（仏語学二等教諭）、大工原信吉（同三等教諭）、興津辰矩、甲斐謙之助（同教諭心得）の名があり、「外国教諭」としては、ムリエ、ピジョン、フラン、フロイデンタレルの名がみえる。また、東京外国語学校編『東京外国語学校沿革』（一九三三年十一月）には、玉名程三（就任明治十七年八月）をはじめ、中川元（退職明治十二年二月）、辻



今村有隣の墓碑

謙之助（退職明治十五年二月）、上田文蔵（退職明治十二年十月）、佐藤金三郎（就任明治十二年十一月）、山崎豊治（退職明治十四年十二月）の名がみえる。「外人教師」としては、エスナール、ジャン・バティスト・アリヴエ、フール・アントワヌ、プロスペル・フークの名がみえるが、七六年に東京開成学校から転任してきたレオン・デュリの名が記載されていない。外国語学校の初代の教諭となった今村有隣（「有隣」は号、本名は「去三」。一八四五一九二四）は、加賀藩士の子。藩校「壮猶館」で漢学、英学、蘭学を学び、横浜でメルメ・（ド・）カシヨンからフランス語を習い、箕作麟祥にも師事した。一八六九（明治二）年に南校の得業生となり、七二年には横須賀製鉄所の通訳兼翻訳掛を務め、三年にはウィーン万国展覧会の事務官としてオーストリアに出張した。

同年帰国、十二月外国語学校の教諭に就任して一〇年勤務、後に高等商業学校に八年間勤務した。著書に『仏語啓蒙』（一八八二年）、『改訂仏語啓蒙』（一八八五年）ほか、多くのフランス文法書がある。染井靈園の「今村有隣 配末之墓」（その位置は一種イ二号七側）の傍らには「去三今村君墓表」（石川県野口之布撰文）と「今村先生墓道之碑」がある。

レオン・デュリは幕末から明治初期にかけて仏学の指導的立場にあった代表的なフランス人である。一八六二（文久二）年に来日。翌年長崎に設置されたフランス領事館勤務となった。デュリは長崎から京都に転じ、次いで一八七五（明治八）年四月から二年間東京開成学校の仏語科

に來任。就任直後に所屬していた仏語諸芸学科が廃止されてしまい、東京外国語学校に転じることになったが、東京開成学校も兼任した。京都からデュリに隨行して東京に移った富井政章（京都府官立仏語学校に学び、一八七四年九月東京外国語学校仏語学科に入学、七七年に退学、渡仏。リヨン法科大学に入学。八三年に法学博士の学位を得て帰国。司法省、文部省をへて八五年から東京大学教授、帝国大学法科大学教授・学長、京都法政学校長、立命館大学長、和仏法律学校長を歴任）、高木豊三、小林樟雄も外国語学校に入学、そこで梅謙次郎（明治十三年卒）と一緒にデュリから学ぶことになった。仏語学科第一回卒業生の田部芳（明治十二年卒）は司法省法学校に入学して、欧州に留学、帰国後は判事に任官し、大審院部長判事などを歴任した。多数の人材を育成したデュリは一八九一（明治二十四）年死去。

ムリエは外国学校の語学課程の編成に寄与し、フークとアリヴェは東京外国語学校のほかに開成学校、司法省法学校、東京大学などでおよそ二〇年にわたって教鞭をとった。アリヴェは『仏和辞典』（丸屋、一八八七年）などを著して仏語学の発展に貢献した。

この草創期の仏語学科の卒業生は、一八七九（明治十二）年に二名、八〇年に七名、八二年に九名、八三年に四名、八四年に三名を数えている（『東京外国語学校沿革』、一九三二年、五六―五七ページ）。

一八八五（明治十八）年、官立東京商業学校が設立され、本校は一時廃校となる。一八九七（明治三十）年、高等商業学校附屬外国語学校として復活。一八九九（明治三十二）年には独立して、文部省直轄、東京外国語学校が発足した。